

討 論

(岩本川事務局) あけましておめでとうございます。松もとれないうちから、お集まり願って大変恐縮ですが、何分今年は大会の共通課題が決っていないので、事務局としては正月とはいっても安閑としておれません。幸い前号の『研究通信』で島崎総会員から積極的な問題提起がありましたので、今日はそれをめぐって討論するともに、皆さんからそれに関連する話題提供をして頂きたいと思えます。なお、その前に今日、御出席なれない方で、宿題委員の安原茂会員と長谷川宏会員、それに雪江美久会員から書面にて御意見が寄せられておりますので、私の方から御紹介致します。

まず、安原会員からは、

「(前略) さて共通課題の件ですが、基本的には島崎会員の提案に賛成です。しかし、これを、どう具体化するかは、まだ小生にもはつきりしません。ただ、次の諸点は当然必要でしょう。①、生活破壊の実態認識。しかもこの場合、**「破壊」**というのは、弁証法的に理解されねばならないように思われます。**「破壊」**されつつも、そこに新たな展開の問題もあわせ考えねばならぬからです。②、破壊に対するスタンダードな農民生活像の把握。③生活構造ないし生活組織に関する古典的理論の再検討。とりあえず以上のようなことです。こんなことをもう少し展開して考えてみたいと思います。

なお、島崎会員から「共通課題」は、「農民の生活」をめぐる問題、ということではなく、単的に「生活破壊」というタイトルではないかとお伝えしてくれとのことでした。」

というお便りを頂いています。つぎに長谷川会員は、

「島崎会員が提案された「農民にとっての生活破壊」とは何かを問う」という共通課題は、これまでの「資本主義と家」の問題関心を持続させながら、それをより具体化したテーマであるということとはもとより、伝統的な生活の枠組を崩されつつも、そこから新しい生活の枠組を生み出してゆく農民の自主的エネルギーの存在を明確にしたいと考えている私の問題関心からも大いに賛成です。

農業生産力破壊——分解の歪んだ進行——農民生活の枠組解体という道筋の上に具体的な農民の生活破壊の実相を広汎に報告し合う場合、農民生活の枠組解体とかわらせて先の大会テーマである「家」の変容過程が追究されてよいと考えます。

さらに、生活破壊の実相の中に破壊されつくせない農民の生活の論理といえるものが見出せるのかどうか、見出せるとすればそれはどのような展望をもちうるものなのか、といった点の究明が望まれます。(以下略)

「(前略)当日は残念ながら……参加できませんが、内容的には大変関心をもっているところです。と申しますのも、私のような仕事(社会教育)に関係しているものにとっては、実践・政策科学としての社会学の問題がつねに問われてきたし、これからも問われていかなければならない状況におかれていますので。もちろん、このことは村研の会員の皆様に共通した課題でしょうが。『研究通信』九九号での島崎先生のご提案には大賛成です。実は、私も、こ

の点についての問題を指摘しました。私が『社会科学の方法』第八巻第一号(御茶の水書房、一九七五年一月)に書いた「社会学における生活構造論について——社会教育とのかかわりから——」もその一端です。

研究会には参加できませんが、山形で開催されるメリットを生かして、この際、住民サイドでそれなりの活動をしている方、あるいは隣接領域(必ずしも学問領域にこだわらず——現に生起している問題領域で——)でプロフェシヨナルな仕事に従事されている方に登場願って、素朴な、しかし、ナマナマしい意見を交換しあってみてはいかがでしょうか。私たち自身や学問についての反省の機会(一寸オーバーですが)として生かしてみても思う気持があります。(以下略)

という考えを述べておられます。なお、雪江会員の前掲論文は、彼の松原治郎編『社会開発論』社会学講座一四(東京大学出版会、一九七三年)所収論文への布施鉄治・岩城完之・小林甫氏らの批判に対する反批判ですが、そのなかで『社会開発論』所収論文の要約の行なわれている部分は、我々のこれからの議論とも関連が深いと思われまますので、ちよつと読んでみることにしましょう。

「高度経済成長によつてもたらされた生活のひずみが、さまざまな形での矛盾として露呈されつつある現代の状況において、生活構造論の課題を求めるとすれば、それは何よりも、現代社会生活にみられる矛盾の構造を具体的な生活次元においてとらえ、今日的な生活問題の論理構造を明確にしながら、一方でその解決に対処しうる有

効な理論研究を展開していくことではないのか。したがって生活構造論の内容としては農民の生活が破壊され、都市住民の生活が困憊し、非人間的条件が加速度的に再生産されている現状変革への要求が最大の願いとして含まれているはずであろう。すなわち、社会学における生活構造研究の今日的意義は、現代社会の基本的価値法則の論理構造をあきらかにしながら、その反映として具体化されている諸現象をより正確に把握し、そこに示されている生活法則に生活の論理をうきばりにすることによって、両者の、まさに今日的な相剋関係をあきらかにすること、そしてそれをふまえて両者の矛盾的關係を解消するための具体的方策を提示することではないか。したがって、このような立場に立つ生活構造研究はそれ自体が現実的であればあるほど一時的にであれ、現代資本主義体制の合理的展開を求められた形で示される側面があることは認めざるをえない。さらに、また、これまでのわが国の経済・大資本中心主義的な社会開発政策に対して、ある程度の反省がなされているにもかかわらず、現実には、むしろそれとは相反するかたちで開発政策が再編されて具体化されている現状に対して、強固な抑止力を創出していくことが、さらに今日的な課題となっている。生活環境行政の貧困と、一定程度の成果をおさめながらも、その弱さと限界性が指摘されている住民自身の組織的対応力の現状をみると、かかる抑止力は現実的な説得力をもつ理論研究とそれをふまえての政策的提案とによって創出していくことが必要ではないか。したがって、社会学における生活構造研究が生活の全体的把握の必要性を提唱するときに、その

必要性を提唱する背景にある問題意識と、全体的把握によって実際にとらえうるものが、はたして今日の生活問題の解明と解決に対してどれだけのメリットをもつものであるかがきびしく問われなければならないのである。それ故に生活構造論の展開が抽象的・一般的生活学の提唱におわってはいかならないことはいうまでもない。このように考えるならば、実態的概念としての生活構造概念を導入して展開される生活構造論は、その基本において生活環境の改造を理論化するだけの力を用意していかなければならないのではないか。

以上が、私の手元に来ております意見です。ここで生活構造論といったことばがでてきていますが、私のような経済史をやっている者にとつて必ずしもなじまないことばです。いままでのことをふまえながら安孫子さんの方から話題提供して頂きたいと思ひます。

(安孫子) もともと生活構造論というのが、どういふものなのか我々あまりよく知らなくて、社会学の方々が考える生活問題というのはどういふようなアプローチをするものなのかということが、こっちは一寸見当がよくつかないということがあるわけで、ただおとしのこたになりますけど、仙台でありました研究会の時に一寸話をしたのは、経済学は経済学の方からみて行った労働者家族と農民家族の生活の違いがどういふところにあるかっていうことを考えようとしたわけです。そこで出てきた問題というのはかなりまあ経済学なら経済学っていうことに限定してしまつたもんですから、一つは家というものの持つてくる機能からいってみれば、労働者家族の場合には生産機能というものが家にはなくなつてしまつていふわけ

で、狭い意味の生活機能だけになっている。それに對して農民家族の場合には生産機能もあり、同時にそれが生活の組織でもあるという形でいわば人間の生きて行く本来的な狭い意味での生産と生活というものが農家の場合にはある程度びったりとくっついている。もちろん、それは家だけで完結したら、完全な自給自足になっちゃうわけですが、家だけでは完結してないわけですから、かなりまだそういう性格を持っているのが農家だと、それに対して労働者家族というものは少くとも生産機能はまずほとんど家というものにはなくなっていると、そこから出てくる二つの種類の家族の生活構造の違いといったものを考えてみたい。例えば家族構成はどういう様に規定されるだろうかとか、財産の相続というのはどんな風に行なわれるだろうかとか、まあもっといえ隣り近所とのつきあひとか、そのほかまあ家の持っている基本的な生活機能といったものをどこかでおさえないと、そもそも出発点が決まらないんじゃないかという感じは持っているわけです。ですからこの点については、多少理論的であつたり、あるいは歴史的であつたりするかも知れませんが、けれども、生活破壊ということを考える場合にもそもそもこの二つのタイプの家の持っている生活機能といえますか、生活構造といえますか、そういうものをどこかできちんとおさえ、それを少くとも共通の認識にして話を進めて行かなければいけないであらうという点は第一におさえおきたいわけです。そこで問題は、二番目に農家の生活というものを考えるときに、通常、生産の単位であり、同時に生活の単位であるといった場合に、理想的にいえばそれは農業

所得で生活できるということになるんで、その農業所得を土台にして、その原則の上にとどの程度農業外からの収入を積みあげて行ったらいいか、社会学では何と云うか知らないですが、どの程度の生活水準があればということを上記に考えて行くと、ここでいう生活水準というのは、所得水準とか消費水準とかいうことではなくて、いろいろ文化的な環境とか自然とかといったものを含んだ生活水準という見方になるかと思うんですが、とにかく土台としては農業所得で考えると、それで基本的にはまかなって生活の中味をよくして行くかと、あるいは新しくつけ加えて行くかということになると思うんです。しかし、現実の生活破壊というものは、一方ではその生活水準自体が問題になるんじゃないという、きわめて常識的な生活破壊という、実は貧乏という、一口でいってしまえば、貧困とか、公害で健康がむしろまされるとか、いわばそういう一般的な意味での生活水準の破壊ということと同時に、農民の生活破壊を考えた場合には農業所得で喰えないという状況を、この生活破壊の中にそもそも入れるのか入れないのかということが一つは問題になるだろうと思ひます。つまり兼業所得と農業所得をたしてある程度の収入をえてやると生活が維持できるというとき、それを農家としての生活破壊と見ないのかどうかということです。こういう風な形で十分な生活ができるというのであれば、そして、まわりの環境と適当に文化的なものを持っていけば、それでいいということにもなるわけですけれども、農家のか農民のかといった場合に兼業所得が三分の二ぐらいあると、三分の一しか農業所得がないといった状態とい

った場合、一体これをどう考えるかっていった問題があるわけですね。実はそれでいいんだという議論と、いやそれじゃ駄目なんだという議論とに分れるだろうと思うんです。ところが問題はそれを判定するときの基準を一体どこに求めるかということ実は非常に難しいわけです。非常に主観的に農民だから農業だけで喰えなきゃいけないんだという議論はいと簡単にできるんですけれども、なぜ農民が農業所得だけで喰わなきゃいけないんだということになると、それを客観的に、あるいは科学的に判断できる根拠っていうものはどこにでてくるのかという問題にまでつきあたるわけなんです。人によっては逆に兼業と両方合わせて喰えりゃあいいんで、農業だけで今頃喰おうなんていうのは間違いだっていう議論もおそらくありうるわけで、現在の政府なんかの考えているところはどうもそういうところがあるわけです。そうなってくると、さきほどいった貧乏、それから戦争だとか公害だとかいうことで生活破壊が起きてくる問題と、もう一つおきたところで農民にとっての生活とはどういうのがノーマルであるのかという規定をしないと、農家の生活構造論なんていうのはそもそも組み立てられないのではないか、という気がしたんです。そこで今いった農業所得で生活できるものかどうかというところの是非を議論するときの基準は一体何であろうかということ、一つは生産力的にいつて一体どうなるであろうかという議論が今までもあったし、これからもあるだろうと思うんです。ところが考えてみるとわかるように、農業所得で生活できない、兼業にかなりの時間をかけているという場合の生産力構造っていうのは、どっちか

っていうと労働生産性といいますが、時間あたりの生産性をうんと高めておいて余った時間を兼業にふり向けて行くというわけです。ですから、単作大経営っていうか、機械経営っていうか、そういうことは労働生産性をあげるっていう上ではいいことだという判断がでてくるわけです。逆に農業所得だけで喰おうと思うと、家族の労働力を自家農業で完全燃焼させようと思えば、農業労働時間というのは非常にふえるわけで、それに見合うだけ生産物ができるかというところ、そうじゃありませんから、労働時間あたりの生産性というのは一般的には落ちてくるわけです。それは機械を使わないで手でやった方が家族労働の燃焼ということでは大いに意味が出てくるわけです。たしかに支出もそれによっておさえられるし、仮に所得が変らないとすると、その方が農業所得が増えるという当然のことになるんです。ただ、労働が非常にきつくなるし、かつてのようには手作りの農業に戻れるかというと、まあ、そういう風に農業生産力の問題というのを考えてみると、どっちにせよやっぱりどっか、どういう生産力を選ぶかという判断をしなければいけないということになります。で、どちらの生産力を選ぶかというその判断は一体どこから出て来るかかっていうことになるわけです。そうなるかどうかとも循環論になってしまつて、農家が農業所得で喰うんだっていう前提に立てば、労働生産性が落ちたとしても家族労働で農業をやつて行けるんだからいいんだということになるんですが、ところがそうではなくて兼業所得も合わせてやつて行くんだということになれば、どんどん機械化してあまった時間を農業外に働きに行った方

がいいんだという議論になってくるわけです。どっちが原因でどっちが結果なのか、どうも決め手がつかないというのが現状ではないだろうか。おそらくそういうことを最終的に判断するのは、社会観についていか、世界観みたいなものに行っちゃって、階級的な収奪関係にとってどっちがどうだっという議論をやる、つまり低賃金労働者として兼業に行くっていうのは、資本にとって非常にプラスになるんで、それは農業にとって決してプラスじゃないっていうような議論をやる、大変根本的な世界観みたいなことで、もう分れてしまつて、それ以降、農家の生活の見方ももうずっと変わって来るといふ、そういうことになってしまひはしないかという心配があるわけです。そんなところをどうやって詰めて行くかということがどうもひっかかるんじゃないかということです。それからもう一つの見方についてのは、さきほど一寸こういいましたけれども、労働者家族にとつては、いわゆる生活だけの単位っていうのは別にないわけですが、農村で暮してゐる、しかも農業をある程度やりながら暮してゐる場合には、果してこの一軒の農家だけ切り離れた生活、都市の労働者みたいな「隣は何をする人ぞ」式の生活ができないという生活環境があるわけで、これは必ずしも封建的な共同体という意味ではなくて、何がしかの共同的な関係というものがある。それはまあ相互扶助といつてもいいわけですけど、そういうような生活条件が農村にはまだ残っているわけで、それをやっぱり兼業なんかに行くことによつて大幅に変えて来ているという問題が現在あると思うんです。たとえば従来に契約請といつたようなものが非常に変わるとか、

村の規約とかいうものが大幅に変わるといふような問題もある。そういう変化を見ていけば、たしかに生活の変化ということも出て来るわけですけども、それによつてこの非常に従来に生活のしくみと違つた生活のしくみ、ある意味では生活の破壊といふような局面も現われているから、生活しにくくなつてゐる、あるいは隣近所と段々つきあいがなくなることによつて、自分一軒だけではどうにもならなくなつてどっかへ出て行かなくてはいけなくなつてくるという状況というものが一方ではありうるわけなんです。もし、そのような生活条件というのを維持するのが正しいんだということになると、なるべく兼業なんかにには行かないで、農業に多くの力をつぎこみながら、村の中の共同性といふものを維持して行くといふ、そういう行き方が必要なんだといふ議論が当然出て来ると思ひます。とくに最近、そういう議論についていふものが何人かの人から出されているわけのでして、守田志郎さんが朝日新聞社から出した『小さな部落』なんていふのは、そういう考え方をとことんまで突き詰めたような考えです。一見逆戻りするんじゃないかといふ感じが非常にするわけなんですけれども、そういう問題があるわけなんです。そのことを、そういう側面での生活の変化を我々はどうかとらえるか、ということなんです。かつてはこれを農村生活の近代化とか民主化といふ形です。しろ否定してきたことなんです、その近代化・個別化のために否定したものが結果的にみて必要だったと、だからそれをやっぱり大事にして守らなくてはいけないんだということなんです。これはなるほど農民の生活ということだけでなくて、人間らしさといふよ

うな議論を背景として出て来るわけですね。その方が人間らしい生活なんだと。だから農業見直し論というのは一つの文明論になっているわけです。人間の生活をもう一回見直そうっていうことになりひっかかりがあるわけで、隣が何をしている人かも全然分らんというような、そういう生活は非人間的である。むしろいろんな触れ合いを持った方が人間的だという発想がどうも非常に最近強まっているわけなんです。そういうのと同じ形で生活破壊というものを考えていいのかどうかということが実はあるわけですし、ぼくは今考えているのは、いわゆる生活破壊の進行に対する批判というか反省と同時に、そういう一見人間味のうしろにつながるようなものが持っている農本主義的な考え方というか、あるいは一寸ことばは悪いですが空想的なものへの復興みたいなものも非常に気になるっていうか、警戒しなきゃいかんっていう気がするんです。そうすると、本来のそもそもの農民生活のあり方は一体どうなのかっていいますと、今二つあげた生産力な側面とか、あるいは村の中の共同生活といったような側面とか、つまり人間の触れ合いといったような面での側面だとか、こういういくつかの点でちゃんと吟味してみないと、そもそも生活破壊というものをただ単に出すわけには行かないような気がしてるわけなんです。同時に生活破壊といった現象が一体どこから出て来たかという論議からいうと、前後逆になるかも知れませんが、その生活破壊を引き起して来た、先ほど雪江さんの議論として紹介して頂いたように、高度成長、そして、その中でとくにこの農村に対しては外枠としては開発というようなこと、内

側の問題としては機械化、大型機械化という形に象徴されるようないわば生産性の神話といえますか、そういう内外両面からの政策によって農民の生活というのは破壊されてきているというか、非常に大幅に変わって来ているという点もやっぱり明らかにされなきゃいけないと思うんです。この点は、しかし、農民の意識としてはわかないと思うんです。むしろ、そのような原因によって作り出されて来た生活破壊を一体どう見て、どっちの方向へ持って行くことがそもそも大事なのかというあたりを単に主観的な問題ではなくて、科学的な問題として取り上げるには一体どうしたらいいか、おそらく経済の側からいえば、そのことが農業生産力というか、あるいはもっと広く日本全体の生産力構造からみて、一体農業の生産力はどうかあるべきであって、そのためには農家の経営がどうあるべきで、その上に成り立つ生活っていうのはどうななきゃいかんかという議論で考えられるんだろうと思いますし、もっと別な側面からアプローチして行けば、今いったようにこの村ん中のいろんな生活であるとか、そこん中における生活破壊要因、そういったものをどうやって克服して行けばよいかっていうような、そういう点からの村の生活農民の生活も考えて行かなきゃいけないんじゃないかっていう気がしてるんです。私はあの、これは経済学の方にも関係があるんですけど、最近よくやってる、いわゆる家事労働っていうものを社会的労働に置き換えて行くというとき、置き換え方、どうも洗濯機を入れても電子レンジを入れても置き換えていけば置き換えですし、クリーニングに出してもいいわけですけども、そういう間

題ではなくて、生産主体がみずから決定できる、あるいはみずから決定に参加できる、そういった置き換えっていうか、いわゆるこの家事労働の社会化っていうことばなんですけれども、単にこの資本の作りあげた商品とかサービスを採り入れて置き換えて行くというのは、本当の意味での家事労働の社会化ではなくて、自分が決定に参加できる、つまり、労働の疎外を克服できるような意味での家事労働の社会化っていう問題を出さないといけないんだろうと、で、その点は農村であろうと都会であろうと現在の生活の一番の土台、物質的な土台のことですが、その土台のあり方をはっきりさせられなきゃいけないんじゃないかと思ってるんですけれども、そのような家事労働のあり方の土台とするような農村の生活を追究する方向がもう一つ出て来ていいんじゃないかというような気がしてるわけです。まあ、いきなり家事労働までおりに行くということは、一寸時間がなくて、今あまり丁寧に申し上げられないんですけど、おそらくそういうところまでおりに考えてくると、農村の生活の方向性というようなものが、もっとどう別な観点が出てくるんじゃないだろうかっていう気がしてるんですが、それは経済学的な意味での、例えば農業生産力がどうあるべきか、そのためには農業経営なり、農民の生活なりがどうあるべきかであるかという議論と違った形で、おそらく議論が組み立てられて来るであろうと思います。ただ、そのことは突き詰めると、どこかでは同じ点に達するでしょう。もっと基本的抽象的な人間の歴史なんという点では一致して来るだろうという気はして来るんですけども、アプローチとしてはかなり違う

し、経済学アプローチの仕方と、それから経済学では従来やらなかったいろんな生活環境あるいは生活習慣というものを引くくめられた生活構造みたいなものからのアプローチとで、できれば同じような結論が出て来ることになるかと非常にいいということになると思うんですが、さしあたりそういう二つのアプローチの仕方が生活破壊の問題についてはあるような気がするんです。そこまで戻さないで、ただ生活破壊の実態だけとか、あるいはその原因だけを見ていたんでは、あんまりプラスにならないっていうか、従来、常識的に知っていることをただ詳しくテーマとして再確認するだけに終るんじゃないだろうかという気がして居るんです。

(岩本) 安孫子さんにいろいろの問題を出して頂いたんですが、関連して細谷さんの方からも一つお願いいたします。

(細谷) ほとんど私のいいところは安孫子さんについて頂いてしまってるんで、あまりないんですが、さきほど御紹介のあった安原さんのお便りのなかで、スタンダードな農民生活像は何なのか、ということをおさえないと駄目だという話がありましたけれど、これも今の安孫子さんの話とかなり通じるんだろうと思うんですけど、例えば農村にいつて今年なんか非常にUターン現象っていうんですか、出稼ぎができなくなると、それでまあ村に戻って来るということがあった。そうするとその連中が何をやってか、もう出稼ぎは駄目だから、例えば椎茸をやるとか、野菜をやるとか、そういうことをしようじゃないかということを考える。やろうと思っても今度はなかなか市場との関係でとてもうまく行きそうもない

と、いや俺はやつぱりうまいつてがあるから出稼ぎを続けるんだとか、という形で普通農民の生活つていうことを考えると自家経営の中で労働力を燃焼するわけですね。つまり、プラスチックアルファードを導入するか、あるいは複合経営をやるとかしてというのが、いわばノーマルな、スタンダードな農民生活の構造であるという、まあ従来我々が当然のこととして持つて来たイメージがあるわけなんですけどね。それが現場の農民自身の意識の中では最近是非常に簡単に相互転換しちゃうんですね。出稼ぎに行くか、野菜をやるかという形で。俺は出稼ぎに行くから駄目なんだとか、いや俺は農民として頑張るからホーレン草をやつたり椎茸をやるんだつていう、そういうあれがあんまりなくて、非常にこう気楽に選んじゃつてるつていうところがあつてですね。そういうことの現状をみて行くと、先生どうしたらいいか、なんていわれると、いや農民だから農業だけで頑張れよ、つというのでも、何だか白々しくなつてくるつていうようなことになつて、そういう農民の生活構造つていうものの中に労働力の直接の商品化つていうことが非常に深く入りこんでいて、そういう中で今、農民の生活構造とは何ぞや、つていうようなことが改めて問い返されなければならぬということになつてるといふことは僕も非常に強く感じてしまつてね。おそらく、その点では基準として出て来るのは、一つは先ほど安孫子さんがいわれたような農業生産力とはそもそも何なのか、という問題と、もう一つは農民の共同の生活組織のあり方つていうものがどうなつてゐるのかつていうことが当然あるし、多分、僕も安孫子さんのいわれる今いつた

二つの方向からつめて行くのが必要なんだと思うんですがね。ただ、その場合、やつぱりこれも安孫子さんがすでに御指摘になつたんですけれど、それじゃ今度はそういう従来の手労働にもとづく農業生産力がいわば機械化され、そのことによつて出稼ぎがどんどん増えたと、だからまあ複合経営に戻ろうじゃあないかと、これはまあ一つ私は正しい指摘だと思つてゐるんですけど、あるいは逆にもう一つの面からいえばそういう共同の組織が破壊されて、例えば消防一つもできなくなつちやつたと、やはり村に残つて皆で共同のあれを作つて行こうじゃないかと、これもまたもちろん正しいと思うんですけども。うつかりすると、これがあの再版農本主義みたいなことになつちやつてね、それじゃあまた田植機やめて手植えにするとかね、それからまあ刈取機械をやめて手刈りにすればいいとかいう話になつてくると、また妙な逆転にもなり兼ねない。それじゃそういう新しい機械なり新しい生活物資、例えば手軽な食品等々の消費生活の手段をどういう風に組み込んだ形で新しい生活体系つていうものが作られるのかどうかつていうことになる、私には今んところまったく五里霧中で、答えが出ないんですけどもね、おそらく今、問題になるのは安孫子さんのお話にもありましたように生活破壊という実態をただ報告するということだけではなくて、一体何を基準にして破壊になるのか、あるいは現在破壊されているのは事実であるとするれば、どういう方向にその解決の道を見つけて行くのかというあたりでかなり見解が分れるし、うつかりすると再版農本主義にもなりかねないということがあるし、そこが大きな論点になるん

じゃないかと、私は思います。

(岩本) 今、安孫子さん細谷さんともに、再版農本主義についてたことに陥るのは警戒する必要があるというのをいわれたんですけれど、私も最近この有機農業とか複合経営とかを唱え、農民は村にいて農業をやるべきであるという風なことを主張している、あるいはもつと住民運動なんかにかかわりを持つている人たちの発言なんかを聞いてみると、日本回帰とか共同体の復権といったことがきわめて安易に、しかも流行的に使われていることが大変気になるんです。こうしたことが西欧化という形で資本主義化を進めた日本近代化の帰結である現在に対するやり切れなさ、とくに戦後民主主義の形骸化に対する絶望感に起因していることはわかります。しかし、それが西欧民主主義を至上と考え、一寸どぎつい方をしますが、日本社会をいたずらに古くみることにみずからの進歩性のあかしを求めているような進歩的文化人が戦後民主化の過程でふりまいた「バラ色の市民社会」が虚妄に終ったことへの反省からだとすれば問題だと思えますね。近代社会は一切の人間関係が商品関係を通して現われる冷酷な資本主義社会なのであって、それを「バラ色」にみるなど、そもそも幻想なんです。バラ色の市民社会」など実現されなくとも、今日の状況はまぎれもなく資本主義社会なんです。だからといってこうした状況を脱するのに、共同体を再興すればよしとするのは短絡にすぎると思います。果して共同体本来の性格を知った上での議論かどうか疑いたくなりますね。共同体は、いつもいうことですが、人間の生産力水準が低く、個人

が社会の基礎単位たりえぬ段階で、人間生存の前提として構成された集団なのであって、そもそも個人の自由意志で作ったり離れたりすることができるといった性質のものではないんです。だからこそ近代社会成立のためには、自我の確立の桎梏となる共同体としての「ムラ」や「イエ」は解体されなければならなかつたんですね。しかも、もう一つ日本の場合、重要なことは、我々が戦後民主化の過程で非民主的諸悪の根源として打倒の対策とした明治憲法的な「ムラ」や「イエ」は、実は本来の共同体なんかではなく、日本資本主義発展のための必要から存在を容認された擬似共同体にすぎなかつたわけです。それゆえにこそ明治以降の資本主義社会においても強固な存在たりえたわけなんです。このことを私はいつもいつてるつもりなんです。なかなか理解して貰えません。しかるに、今日、共同体は上に対する抵抗の主体であり、かつ横に一定の自治規範を持つものだったとして、その再興を主張する向きが結構あるんですね。まあ共同体の歴史のある時点で、そういう共同体もあつたときでしょう。しかし、そうした共同体は少くとも我々の記憶にある時代、あるいは今から三代前、いやもつと前にもなかつたことだけはつきりいえます。すると、我々の知るのはさきほどの擬似共同体だけなんです。だから現代における自治の根拠を共同体に求めるのは、近代社会を「バラ色」と考えたのと同様の幻想ですよ。こうした状況で共同体の再興をはかれば、現われるのは隣組と家族制度だけです。雛型を過去に求める限り、「いつか来た道」に戻る危険が大きいのを忘れてはならぬと思えますね。日本回帰なんていつて

ネオ進歩的文化人が幹がっていると、とんでもない人たちを喜ばせることになつちまいますよ。まあ、こんなことが安孫子さんや細谷さんの口から再版農本主義ということばで呼ばれたんだと思うんですが、やはり、ここで明治以降の「ムラ」っていうようなものを考へるときに、それは共同体だったんだという風なとらえ方をしてみたってですね、それで議論するのはどうもおかしいんじゃないかと、私はいつもいうんです。だから私はここで擬似共同体なんてことばを使つたわけですが、つまり人間の社会の中で共同っていうものはいつでもみられるわけなんで、それがいつでも共同体とは限らないというのがこれも私の年来の主張です。だから、今でも「ムラ」に行けば、相互のつながりなりなんなりっていう形の共同の組織はあるわけけど、それを今度はその共同体として復活させようというような考えを農業経済学者であるとか歴史家であるとかがいうことに非常な問題があるというふうな気がしてゐるんです。

(安孫子)　そういう考え方の典型っていうのは、三一書房から出た『農に生きる』っていう五冊ばかりの講座ものですね。とにかく全体通じてそういう姿勢持っているわけね。あれをやつてくと、この資本主義っていうものが持っている人間史的な位置づけっていうものがまったく否定されちゃうんで、資本主義なしに人間の将来っていうことが出て来るということになるわけですね。それで僕がまあさつき世界観っていうか社会観っていう非常に漠然としたことばで表現しちゃつたわけですけども、資本主義というものの持つてゐる人間史的な位置づけなり役割なりっていうものを否定して、そ

の次に人間の未来像といったものをパツと描けるものか、あるいはマルクスの立場に立つてやはり資本主義というものが人類の未来にとって必要な経過点である、非常に不十分というか、それ自体克服されなければいけないものとして、必要な経過点であつたのか、最後はそこにかかる問題が沢山でてると思ひますね。現在の農村の置かれてゐる問題なんかでも、生活破壊といわれてるものも、いつてみれば資本主義の結果である、まあ資本主義の結果といつても非常に具体的に日本の六〇年代以降の高度成長、地域開発と生産性神話という、そういうものによつてもたらされた結果であるということばは、すぐわかつたとしてもね、それじゃあやみくもにその原因をすべて否定してしまつて失なつたものを取り戻せといつた調子で行くか、でなければそういう状態はそういう状態としてそこからどうやってそれを克服するかっていう風に生活破壊をみて行くかというの基本的な分れ道だつて気がするわけですね。僕はさつきは家事労働なんていうことを突如いい出したわけなんですけど、それは前の疑問からいうと、とくに戦後になつて五五年以降はつきりしてくるわけけど、農家の家計費の下方硬直性なんてよくいわれる問題がありますね。肉体的最低限度まで下がるなんていうことはもうしないわけで、最低これだけは残しておくという現金支出は必要だつていうことが出て来るといふそれ自体が資本に取りこまれた結果で、家事労働が変えられて来るからそういう状態が起きて来ると思ひますね。だから、戦後の農家家計の下方硬直性っていう問題を本当にきちつとやろうと思つたら、家事労働がどれだけ資本によつて置

き換えられてしまつて、資本の利益のために、利潤追求のために組み替えられたかという、その吟味なしには下方硬直性の問題についてのはやっぱり出て来ないんですね。それが土台にあるから、その上に出て来る農民層の分解のしかたとか、分解とまで行かなくとも、農民層の行動を決定するような基準が大幅に変つて来るという問題があるわけで、その辺の物指をやっぱりはつきりさせないと、生活破壊っていうものをどういう風にとらえて、どういう風に規定するか、あるいはその先をどういう風に展望するかっていうことは出て来ないだろうっていう気がするんですね。

(岩本) それでこれはまあ一つ非常に具体的な例になつてしまつたわけなんです、山形県じゃ例の過疎山村なんかで集落移転というのやつてるわけなんです。まあ白鷹町であるとか小国町であるとか、西川町であるとか、をやつていて、白鷹方式とか小国方式なんという名前でもって呼ばれてるんです。これを県庁あたりにいつていろいろ話聞いとると面白いです、実際に計画立案した人たちに聞いてみると、上に課長や何か聞いて話をしてるときはともかく成功だつたつていうような話を我々にするんです。ところが、個人的に話してみると、実は非常にまずい失敗があるんだつていう風なことをいうんです。だから、役人としては失敗といえないけれど、実際にやつてしまつた結果としてはどうもあればまずかつたんじゃないかつていう印象を個人としては持っているんですね。これは私自身が西川町に昨年の夏に行つたときに見て来たことなんです、この町では四五年以来、小倉・太平・上小沼・四ツ谷・北山・征矢

形・高野・境道という八集落の集落移転をやつてゐるんです。最小が境道の一戸、高野の二戸中一戸、つぎが征矢形の一〇戸中五戸、北山の七戸全戸、さらに小倉の一〇戸中八戸、四ツ谷の八戸全戸、大平の一三戸中一二戸、最大が上小沼の一三戸全戸が町の中心である間沢地区に造成された移転者用の住宅団地に移つてきてゐるんです。距離にしてそう近いところで五、六キロ、遠いところで二〇キロくらいの町内での移転ですが。それで移転してきた人たちがどういふ風な生活をやつてゐるかというところ、この町は別に中心部といつても大した産業があるわけでないから、単に移つて来たというだけであつて、新たに農外の仕事に町の中で就いた人もあるようですけれども、ほとんどの者は今度は通勤農業という形で毎日もと居たところにある田畑に通つて、そこで農業やつてるんです。また移つてから早いところでも五年ばかり、まだ移つて一年目というのもあるんですけれど、農作業のやれない冬にはやはり今までどおり県外出稼を考えてゐるんですね。こういう移転つて一体何なのかつて疑問に思いました。まあ、私は新出作りなんて名前をつけてみたんです、年寄りたちはとても団地で百坪ぐらいの屋敷を与えられたところに居てもどうにも息が詰つてしょうがないからつていうので、もとの家に戻つてそのまま住みついてゐるつていうのがありました。まあ耕作期間中だけなら、もとの家がそれこそ出作り小屋の役割を果すんでしょうけど、若い者たちは町の方の新しい家で生活するつていうので、なんかこう変な二重生活になつてゐるようでした。これなんか明らかに行政によつて打ち出された生活破壊だと思ひました

ね。これ実態調査をもっとやってみる必要があると思うんですが、そのとき、何人かの年寄りといろいろ話をしてみたんですけども、彼らが異口同音にいうことは、「じいちゃん、ばあちゃん、もう何もしなくていいんだ」っていわれて、狭い家の中で大事にされて置かれるのに耐えられないんだと、やっぱりの年になっても田んぼにいたいんだと、畑を耕やしたいんだと、せめて庭の草むしりぐらいはやりたいんだけれど、それやることもできないところに押し込まれてるっていうのは非常に辛いつつことなんです。まあ、こんな現象を呈するような集落移転があるわけなんです。この町ではこのほか月山沢が寒河江ダムで水没するんで、その人たちもまたさきとは別の団地に集落移転させられつつあるわけなんです。この人たちは田畑が水没してしまふわけで、さきのような作りはやれない、しかし、町にはしかるべき仕事はないっていうんで、当面働き口に困ってるようです。もちろん、水没地の補償は貰ってるわけですから、さしあたり暮しには困るということもないが先のことはずい分と皆心配してるようでした。一層もつと都会に出たいっていう気持ちも強いようで、すでに何人もがそうして町を離れたらしいですが、町としては過疎化っていうか、要するに統計的な人口減を避けたいために、とにかく町内で移転するように勧めてるといふことなんです。だから、どうもこの方は一たん移つても結局はどこかの時点で町を離れてしまうのが多くなるっていう感じを持ちました。それからこの寒河江ダムのできる奥にさらに大井沢って部落があるわけですが、こっちの方は結局、一応戸数も多いということ

で、集落移転計画が町によってたてられたんだけれども、それに賛成しなかったんです。それで集落移転はしないことになったんですが、そのかわり移転しないことが確定した時点から若年労働力を中心に都市流出が始まり、なかに家を閉めて挙家離村する者が急に増えてきたっていうんです。大体この何年間か部落で赤ちゃんの産声が聞かれないっていうんです。赤ちゃんの生める世代が出て行ってしまったっていいんです。老人ばかりの部落なんです。で、その七〇才の区長さんがここ一、二年、切り花用のリンドウの栽培に成功して、これである程度収入が確保できると、あと八年後に月山を軸としたリクレーション基地が完成すれば、過疎化は喰い止められ、一旦流出した人たちもまた村に戻って来るといっているのは、どうもこう信ずることが生き甲斐になっているんだということを感じましたね。こういう形で、西川町という一つの町の中でいくつもの生活破壊の例を見出せるんです。山形あたりじゃ、とにかくこうしたことはほかでもいくらでも例を挙げればあるんです。

(細谷) そうですね。やっぱりそういう一つの現実、さきほどの長谷川さん安原さん雪江さんなんかもいっておられるんですが、一つは生活破壊の実態の種々層っていうものは出される必要があると思います。それがいろいろ側面からおそらくあつて、一番普通の農業所得だけでは喰えないから出稼ぎに行っているといった農民が外に出て行って破壊かなんか知らないけど新しい要素を村に導入して来るんで、それが家とか村の生活の共同の秩序とか組織というもの破壊して行って、それに代替する新しいあり方というもの

ない、という形での一つの破壊っていうものはあるんでしょね。そのほかに、もつとドラスティックな公害問題とか、勝又さんあたり酒田の調査やつてておわかりだと思えますけれど、過疎の問題なんかでもそうですけど、その辺を整理してみても、破壊の諸相を明らかにするっていうことも一つの大事なことだと思えますね。

(勝又) あのね。僕はこの宿題委員の方のさきほどの意見とかね、それから安孫子さんが問題をかなり広くとらえながら整理してくれているんですが、僕がこれから申し上げたいことは、今、細谷君のいったことと関連するんですが、具体的な生活破壊の実態認識っていう安原さんのいった第一の問題とも関連すると同時に、第二番目の生活破壊に対するスタンダードな農民の生活っていうものをどういう風に規定するかっていう問題にもかかわると思うんですけど、一つはこういう事例があるんですね。これは非常に特殊な例ですが、必ずしもそのまま生活破壊という問題に結びつくかどうかかわからないんですが、大潟村の問題ですね、秋田の八郎潟干拓の。大潟村っていうのは農業所得からいいますと、平均千二百万円ぐらいつてます。もちろん、そうはいってもこのうちから負債を返して行きますから、実質はこれほどではないんですが、しかし、生活水準はほかの農村にくらべれば高いんです。ところが、この村で農業生産にかかわる労働力っていうものを見て行くと、もう五〇才台は全然入って来ないんです。いや入れないんです。だから五〇才すぎると、あの辺の町の日雇労働に行つて、その収入でおばさんたちがギャンブルに沈潜するっていうことが起きてんですね。こうなると、農家

の貧困性ということと、さきほど安孫子さんがいわれた生活の水準というか、そういうことを我々どのように考えたいかかっていうような問題が改めて出て来ると思うんです。これは僕は素人だからよくわかりませんが、こういう問題があると思うんです。労働生産性の問題も含めましてね、僕なんか非常に単純な考え方も知れませんが、労働力に対する等価交換の原則からしますと、一体農民あるいは農業生産者というものはプロということになるんでしょか。つまり、労働の質の問題、労働の質に対する評価っていう問題が、果してあなたは農民であるというプロフェッショナルなその質と、我々素人が行つても農業に従事できるという、つまりオペレーターとしての技術力を持つていけば生産過程の中に入つて行けるという、そういうところの問題をどう整理するかっていうことも今いった大潟村の五〇才台の人たち、その他、程度の差はあれ、機械化一貫体系の中の農業労働力の質の問題を含めて、主観的な方向性ではなく、科学的なものにもとずいた方向性に立つてやりさえすれば非常に面白いと思うんですね。それから赤湯は伝統的な果樹地帯ですがね、その中学三年生にリンゴの花はいつ咲くかという調査をやつた結果、正解は二六%しかないんですね。そうすると、自分のおやしおふくろはリンゴやブドウを作つており、自分たちはそれでもつて養われているにもかかわらず、その程度の認識しかないんですね。こうなると、農家とか農業とかいうものが、農業従事者だけに関するものであつて、もう他の家族にとつては関係ないということになると思うんですね。この辺の問題からいうと、農という

生産の特殊性というものは、非常に単純に農工つて対比してみますと、労働対象が農の場合、生命というものがあつたわけですね、作物にしましては家畜にしましてはね。その生命というものを我々が栽培したり、飼育しているんだというのが、農村社会の最も基本的な根幹にあるんだと思うんですね。これがなくなつてしまつたんでは、もうラボラトリーだと思つたんですね、実験室だ、それは。だからビニール・ハウスみたいなものずつと並べてやつても、工場生産体制みたいなものになつていくせいとか、家族の中でも新しい世代、つまり子供たちはそれほど農業的農家的なものにひたつていないんですね。こういうことをみるのは決して私が農本主義だからではないんです。私自身、農本主義つてものにはつねに警戒的ですからね。しかし、それとは別に違つた意味でですね、農家つていうものはこういうもので、そういうことがなくなれば生活破壊だということになるんじゃないですかね。こういうことを科学的に見て行く必要があると私はいつも感じるんですがね。これは安孫子さんの提示された第二番目の労働者家族の問題と農民家族の問題、あるいは農本主義的なイデオロギー、それから若岩君のいつた擬似共同体の問題とも含めて考えなくちゃならないことだと思つたんですね。そういうことを具体的な例について整理してみれば、その中に横たわつている、生活破壊つていうものに対する我々の科学的アプローチの、そして、それからえられる将来の方向づけの現実の大きな課題が生まれて来るんじゃないでしょうか。

(細谷)

たしかに農業つていうのは要するに生物生産でね、生き

物自身がこう伸びてく、その点が工業と違うわけなんです、伸びてくのは、生き物自身なんであつてね、作物にしる家畜にしるね。それにね、まあ人間が手助けしてやる、助力してやるというのが農業の本質つていうわけなんです、その場合、農業の生産力つていうのが人間なんです。つまり農民の技能とか技術つていうのが非常に大きな生産力要素に實際になつていくわけなんです、そして、それが今までは家族、家があつて、おやじさんがいて、長男がいて、あるいはもつと若いのがいて、家族の中で知識の伝達とかね、技能の伝達とかいふのが一つ、それが非常に大きな生産力要素になつていて、そういう人的な要素がかなり主要な生産力要素となつてきたし、まあ今もなつてはるはずなんだと思つてすけれども、その部分が非常に無視されて、いわゆる機械一本やりみたいな形でこう生産力の発展が非常に跛行的に行なわれていて、それが農民経営のあり方からいふと、単作化と結びついているんだらうと思つたんですがね。単作化と結びついて、そういう機械一本やりの跛行的なあれがあつて、それが農民の家とか村をこわして行く、それが同時にそういう人間の要素という面での生産力要素をこわして行くというのが、今、勝又さんがいわれたようなあの形で現われていると思つたんですね。ただ、その場合に農民経営でいへばやつぱり複合経営がいろいろいうような、あるいはそういう家とか、あるいは村の共同の組織というものが重要だという場合、さきほど安孫子さんがいわれたように再版だか再々版農本主義だかなんかにならないような形で、それじゃあ新しい機械とか農業だとか、あるいは生活面でいへば、

例えば生活様式でいえば自動車なんていうのが農民生活に入っている。それが農民の生活の範囲をもう非常に大きく変えちゃって、それでリクレーションというと部落の中ではなくてゴルフ場に行くっていうような形で再編されてくる。新しい生活要素が入って来た形で、どういふ風に農業の経営形態が生産力なり、あるいはそういう生活のシステムなりってものが再編されるべきなのかという、そこがまだなくて、それが僕は非常に大きな問題になつてると思うんですが、その場合に、僕よくそういうことをいうと、農家の人たちが、「それはわかったと、そんなこと先生いうけど、要するに喰えなきゃ出るだけだ」というわけですね。それはその通りだと、僕は思うし、それはその通りで間違いないんだと思うけれど、ただ、僕は農家の若い人たちなんかとしゃべるつとという、若い人たちが出稼ぎに行くっていうのはただ喰えないからだけじゃないんですね。離れて東京行っちゃうとか、仙台に出っちゃうとか、山形に出っちゃうとかっていうのはね。だから純粹にこの経済的な所得計算だけで、こういう問題を考へて行くとやっぱりどうも間違いないんで、やっぱりもう少し、で、僕はその辺でよく農民としゃべって「生きがい」論をやるんでひんしゆくを賣うんですけれどね。「農民の生きがいとは何ぞや」って話をするんですけれど、どうもその辺でもう少し農民の、さっきの話にまた戻っちゃうんですけれど、生活のシステムっていうものをもう少し全体的にとらえてみて、そのあり方を、経済以外の例えば教育とか文化だとか、あるいはリクレーションだとか、そういうものを含めたものを考へて行くことが、家を単位

にしても地域を単位にしても考へて行くことがないと、農民の兼業をとめて地元に戻って貰うっていうのも、その辺が大事なんじゃないかっていう気がするんですがね。

(安孫子) 一方からいいますと、たしかに農業っていうのは生物生産だからっていうようなことがあつたり、それから生物生産だから、とくに自然循環が重要だつてことになりすね。じゃ、それでもとへ戻つて機械が駄目だつてという形で排除して、仮にまあ昔のようなやり方がいいと、よくあの昔の農民はいつたわけだけど、稲の顔色をみて、とかいういい方がありますね。たしかに、そうなつてくると、経験があるし、非常に技能的要素が強くなつて来るんだけど、他面からいうと、人間の生産力の發展っていうのは、一般的にいえば、こういうことやればうまく行けるんだという、かなり一般化した科学的な一つの認識の上に立つて一般化して、誰がやつてもある程度まではうまく行けるっていうね、そういう状態で技術化するっていうか技術的な体系を作つて行くっていう問題があつて、農業でいうと米なんかについてはもうその状況っていうのはかなり前から出て来たと思うんですけれどね。誰が作つても上手下手っていうのは、そう極端な差はない、いくら程度の違いがあるつてぐらゐでもないんで。そういう方向に進んで行くつていうことも、どうしても考へなくてはいけないんで、あまりにも名人芸的な技能だけにこだわつてしまふんでは、本来の意味での人間の持つている生産力っていうものは進んで行かないだろうつて気がするんですね。これは南郷の農民に聞いたことなんですけど、田植機を使うと密植にな

って非常に倒れやすいっていうわけですね。おとしササニシキが
ずい分ひっくり返ったときは、田植機のせいだっていわれたんです
がね。そのとき、ある南郷の農家で、どうも田植機でやると、株間
もうんと近くなるし、それから一株が本田さんのやつた統計でみる
と平均七〜八本で、多いのは一三本、一四本、それから少いのは一
本二本っていうのもやっぱり出てくんですね。機械だから手で植え
るほど、手だつたら四、五本ほとんど確実に、せいぜいこの三本か
ら五本ぐらいの間で植わるわけでしょう、それが機械でつかむって
いうと、ときとして沢山つかんだり、ときとしては一本ぐらいしか
つかめなかつたり、むらが出てくるわけですね。そんなことで非常
によくないっていうんで、機械の方を作りかえてしましましてね、
株間がうんとこのあくように、苗をこうつかむ奴の間隔を変えまし
てね、改良したわけですね。それからつかむ範囲も、うんとこう広
くつかむんじゃなくてね、なるべく狭い範囲をつかむようにして、
平均五本ぐらいになるように改良したと、そのかわりゼロっていう
のが出てくるんですよ。それはまあ仕方がないから、手で補植する。
そういうやり方をして全然一反歩も倒さなかつたっていう農家もあ
るんですね。そういう形で考えるのか、本当の意味で科学的だし合
理的だっっていうことでないでしょうか。田植機をただ使うなんてい
うのは、むしろおかしいんで、稲なら稲っていう生き物に合うよう
な田植機っていうのはどうなのか、そういう形に変えて来るって
いうのが出てくるんじゃないか、そういう形に替えて来るって
方向なんだけど、ただし自分の家では田植機を買つたら家計費は大

幅に赤字になるというと、手でやるか田植機を買うかっていうと、
またそこで具体的な条件の下で考えなくてはいけないわけです。た
だ、ある程度買える余裕があるんだつたら、本当にそれが稲の生態
にあつたような機械に自分でも改良してみるってというような努力が
必要だけど、ああいう行き方で考えて行けば、機械化っていうのは
必ずしも悪くないと僕は悪くないと思うんですがね。

(勝又) そうそう、そうですね。

(細谷) 私もそれをそういう趣旨でいったんですが、生活面で例
えば自動車を農民が使わんというのはやっぱりおかしんで、都会人
以上に自動車は便利なんです。広いですからね、部落とか何かの
間だつて。そういうものを組みこんだ新しい生活の知識っていうも
のをそれじゃあどうするかっていうことがね……。

(勝又) そういうための努力っていったものの積み重ねの方向で
もって行かないから、生活破壊みたいなものによつて、それが悪循
環っていうか、しばられてしまつて、ニッチもサッチも行かなくな
っているという局面がいろいろ生活矛盾として現われて来ていると
いう面もあるわね。それは確かにそうだと思う。

(安孫子) それから生産力だけに則していうと、いろんな補助金
を出すとかね、融資がつくからっていうことでね、いきなり大型機
械を入れたりなんかという本来の家族経営の機械化体系に合わない
ような奴をばんばん入れて来るという、そこはさつきも資本にイニ
シアティブをとられた置き換えだといったわけですけれども、そう
いう形での置き換えが生活の面でも出て来るし、生産力の面でも出

て来ると、そこに向って、とにかくこれが新しい方向だとか、これが近代的な生産の生活だということを追求して行くと、その先にはとんでもない生活破壊が待ってるっていうことになると思うんですね。やっぱり、これは一つの立体的な運動の問題にどうしてもならざるをえないと思うんですね。一がいに兼業に出ないで、農業だけで複合経営でも何でもやって農業で喰う努力をしろといくらいつてみても、これだけじゃ駄目なんです。

(勝又) それは駄目ですね。

(森) 私も今のお話の趣旨はよくわかるわけなんです、この一寸村へ行った話をあとで申しあげようと思ってるんですが、生活破壊あるいは生産力破壊という場合ですね、置き換え問題が出てくるわけですが、その問題はある程度ですね、考える手がかりというべきじゃあないかと思うんですが、そういうものが少し出てるんじゃないか、もつともそれは誰が出したかっていうのは、それは一寸問題だと思わんですが。といいますのは、この前私、一寸村へ行って、「あなた方、今、簿記をつけてるか」と聞いたら、「そんなことはもう必要ない」というんでね、「どうしてだ」っていったらね、庄内の人がいっただけど、管理センターみたいのがあって、農協で買った品物っていうのがね、一五日おきにコンピューターでポンポンと出て来るっていうんですよ。村の人は、それを共同出資で作ったっていうんですよ。庄内の一円の村の人達の計算が二週間おきに出てくるわけです。ですからね、そんとき、村の人達はそんな莫大な金出してね、そういうものを入れるのが一体いいものか悪いものか

って大議論したんだそうです。で、まあ結果において便利だったというものでね、そういうもの設けるのに賛成したっていうんです。それはいいと思うんですがね、そういう式のものね、今、いろんな形であるんじゃないかと思うんです。例えば、イニシアティブがどつちかっていうことは別ですけど、今のは一例ですけど、ほかにカントリー・エレベーターですか、いろんな形で生産力体系っていうのかな、それに変わってはいないと思うんですよ。だけど地域っていう単位をとってみると、農家の破壊っていうんですが、生産力破壊と裏腹に何かまたそのあまり技術の上ではつきりとはないですけどもね、地域単位にいろんな道筋っていうのが出て来ると、そういったものが一体何であるかっていうとね、こういうこともやっぱり生産力の問題を考える場合にはやっぱり必要なんじゃないかって感じがしますがね。ですから個々の農家っていう形で行きますと、さっきの新農本主義っていうところに基づくかっていうんで、そこんとところから脱出して行く問題が農家の方からは出てないかも知れないけれど、生産力的な体系からは素材的には村の中に相当ばまかれているんじゃないかと思うんです。例えば水利体系にしたってね、庄内なんかでみると、とても昔の農村で考えられないようなものでないんですね。非常に大規模で、細かく考えられたものに置き換えられている風なことを見てもですね、新農本主義で打開できるようなもんじゃないという気が非常にするわけですね。つまり、私は個々の農家の生活破壊、生産力破壊といった場合に、地域を視点に総合的に見て行く必要があるんじゃないかって気がするんですね。

(細谷) そうですね、その辺、地域を単位にした農村生活のあり方が、今回、話が出てるように従来の部落を単位にした、そして、大体自家労働にもとずいた農業を家でやって、その家が軒軒が集まって部落を作って、そこでお祭りもやるし、あるいは屋根ふき井戸がえもやるし、あるいはもう農業労働の共同もやるという、そういういわば部落を単位とした共同組織っていうものは非常に破壊されて来ると。それは確かにそうなんですけども、問題はそこから再版あるいは再々々版農本主義になっちゃうと具合が悪いんで、そういうことはありえないことを、非常にイデオロギー的観念的に一生懸命にいうことだけになっちゃって、さっきから話に出ているように、「あんだ田植機やめろ」とか、「手植えにしろ」とか、あるいはもう「全然自動車使わないで、部落ん中のお祭りだけやってろ」っていうわけには行かないんで、だからその問題を新しい生産力諸要素あるいは生活諸手段が出て来たその中で、どういう新しい生活なり経営のしくみっていうものを作って行くかっていうときに、やっぱり僕は農家の人達自身がどういう風に作るうとするかっていうことが非常に重要なんだと思うんですよ。私なんかも農村へ行つて、農家の青年たちといろんなことしゃべると、「先生どうしたらいいか」っていわれると、「俺はわかんないんだ、あんだたちどうするんだ」っていうことを聞くんですが、それに向うから答えてくれないんで僕も答えが出ないという悪循環になっちゃってるわけなんですけども、ただ見てると若い連中なんかで、例えば誘致工場を入れる場合、その企業の汚水の調査をやつて、それで自分たちの部

落じゃあやつぱりここに誘致工場を置くのがいいのか駄目なのか、しかし、また誘致工場が全然なくなっちゃうと、これまた困る、それじゃあ誘致工場はどこに置いたらいいんだということを、村の行政村の中で、とにかく自分たちで考えようという動きが宮城県あたりでもないわけじゃあないですよ。そういう動きの中で、それじゃ自分たちの今まで部落でやっていたことが、とても部落ん中だけでは解決しないわけですから、それをもう少し広い範囲でじゃあどういふ風に地域の生活組織をどう再編して行くかっていうことを農家の人たちが、とくに青年たちあたりがこう自分たちの地域のまず調査からはじめて、そして、考えて行つて行政なり何なりにぶつけて行くという、そういう動きがやつぱりこれから一番大事なんじゃあないかっていう気がするんですけどね。なかなか宮城県あたりで、それが非常に大きく育つたっていうのがあまりどうもないんですから、具体的にこういう例があるというのを御紹介できないのは残念なんですけど、芽はいろいろあるんですね。青年会で今いった誘致工場の調査をしてみたりね。

(岩本) さきほど、私が生活破壊の例にあげたのは、西川町みたいな過疎山村の中での集落移転にもなう話だったんですが、もう一つ、これは今、私の住んでいる山形の南館、これはまったく都市近郊っていうか、急速にアーバンゼーションが進んだところで、私が八年前に来たときには私達の公務員アパートが田んぼの真ん中に立っているだけのところだったのが、今は完全に田んぼの残っている部分が少なくなってしまっていました。実はここに田んぼ

として残そうとした人達もまわりが宅地になる、あるいは鉄筋の建物の日かげになって田んぼとして使えなくなるっていうことが起きてるとこなんですよ。ここなんかではまあ宅地として売れば、坪十万ですか、山形としては非常に高く売れるわけですから、そうして売った家は当面経済的にはよきそうに見えるんです。けれども考えてみると、金と違って土地というのは一旦手離してしまえば二度と戻って来ないっていうことになるわけで、よしんば今いい値段として売ったとしても、今後もつとこの辺の土地があがるっていうことになる、どういうことになるのかつて、まあ他人の財産のことですが、気になるんですよ。第一、農家が田んぼを売ってしまえば、農家でなくなるわけですしね。ただ、ここに住んでみると、これは農家にとつての生活破壊っていうことになるんでしょうけど、ここはもともとここに住んでした人達が二百軒ばかりあって、あとは我々公務員アパートに住むのが五四軒新入りとして、町内会の中では少数派だったんです。そうすると、町内会でまあ、その村社のお祭りをやるときに旗をあげたりおろしたりする役とか、また町内会長が市会議員の選挙に立候補したときに選挙事務所にかあちゃん達をお茶の接待の手伝いによこしてくれとかいうことを、我々アパート族に押しつけてよこしたりして、だいたいアパート住民といざこざおとしたわけなんです。ところが、今では勢力関係が逆転してしまつて、今では三百五十対二百ぐらいになつちやつたんです。あとから入りこんだのが多くなつて。それで祭りもやめちまえ、あれもやめちまえ、これもやめちまえ、ということになりましたね。ま

あ僕なんかもそういうこといった方なのかも知れないけど。祭りの問題もこれもとからいた人たちにとつて大事なかも知れないけど、消防の問題というのは現実にもつと重要なんですね。で、ここはまた市の消防署が火事になれば来るには来るが、初期消火には間に合わないんで、村の消防団があるんですよ。ところが、村の消防団で夜警やるというときに、もともと一戸持の者だけが出るっていうことになつていたらしいんですが、我々のような者が入りこんで来たり、また新しく家を建てて住む者が入つて来ると、あいつら夜警に出ないのはけしからないんじゃないかつていうことになつてね、私、たまたまアパートの隣組長やらされてたんで一騒ぎやつたんですけど、はじめはこつちが数が少ないから押し切られそうになる、だから町内会を抜ける抜けないつてことまでになつたんですね。こつちとしては、昼間、勤めて来て夜警には出れない、といつたら、先方も我々だつて最近では昔のように家において農業やつてんのほとんどいないんだ、やつぱり昼間あつちこつちに働きに行つてその上で出たんだつていうんですよ。その事情はこつちだつて、まわりの田んぼがどんどん売られてるだからわかりますよ。そのうち、むこうとしては、夜警に出れないなら、かわりに日当出させていうんですね。こつちはそんなのは税金の二重負担だから断わるつて、いろいろやりとりしたんです。ところが、この頃は勢力関係が逆転したんで、むこうからそういうこといつて来なくなつて、もともと住んでいた二百軒の人たちだけで消防団を続けているようですね。それで今でも町内会長に会うと、まあ半分冗談だけでも、もともといた人たち

の方が町内会から抜けたらいいですね。それで新組織を作りた
いてね。こういうこといい出すのも、急速に都市化が進む、しか
も行政の手が及ばないというところで起っている農民の側からすれ
ば大変な生活破壊だと思ふんですね。つまりね、全然生活条件の違
う者達が入りこんで来て、もとい人達やって来たことが何もや
れなくなつて来るんですね、多数決ついでということやると。
ある時期までたしかに部落多数決でもつてあとから入つて来た者を
圧迫したけど、今それは逆転してしまつて、もとの人たちの方
が町内会抜きたいなんていうのは、これあつちこつちで多いんじや
ないかと思ふんですね。とんでもない大工場や大団地ができた
ころではね。

(勝又) 仙台近郊でも同じだね。

(安孫子) 泉市なんかでは今や選挙やつても何やつてももともと
いた人の方があぶないついでいうんでね、大分頭抱えているようす
よ。

(岩本) こうした現象を客観的にみても、たしかに夜警に出ろ
とか、祭りの旗立てに來いとか、選挙事務所の手伝いに來い、なん
ていわれたときは腹も立つけれど、もう一歩さがつて、自分のこと
としてでなくみても、そういうことやるなつていわれてる村の人
達が非常に気の毒だと思ふますよ。彼らはそこにもともと住んで、
そういうこと長年やつて来てたわけですからね。あとから入つて來
た人達が多くなつて思ふように行かなくなつて來たつていうんでは
ね。それから、これはこの問題じゃなくて、冬休みに相馬に行つ

たとき聞いたことなんです、新しく入つて來た人が便所を水洗に
するでしょう、浄化槽や何かつけて。ところがあれどうも余り完全
じゃあないらしいんですね。それでもつて大変いざこざおこしてま
した。これは下水が完備してないから起る問題なんですかね。自分
のうちの屋敷内では浄化槽があつても、そこから先は要するにたれ
流しになつちゃうんですね。

(細谷) これはあつちこつちでトラブルありますね。要するに田
んぼの用水路にたれ流しになつて來るわけでしょう。

(岩本) これもやつぱり農家の側からみれば生活破壊につながる
つていう見方になるでしょう。だから、我々の立場つていうのは、
非常に面白い立場なんです、村落研究者として「ムラ」を見るとき
の眼と、自分が住民としてそこに住むときと、やはり相当矛盾しま
すよ。

(安孫子) いわゆる都市住民的な立場に立てばね、仮に自分の屋
敷の中から浄化槽を通して、それを従来の用水路なんかに入れち
やうんですね。ところが、この用水路の方は皆でせきさらいやなん
か毎年やつてるつていうんで、その人達の主張が当然出て來るん
ですが、都市住民の立場からすれば、そういう水路の管理や何かも全
部自治体でやれとかね、という要求になるんですね。ゴミを市役所
で集めるつていうのと同じ発想にしかならんのですよ。下水完備す
るのは市町村の役割だつてという発想で行きますからね。しかし、
片方からいえば、それだけの税金を出せるかどうかつていう問題か
ら始まつて、出せなければ自分たちが使う用排水路だから自分たち

でやらなければいけないということがあるわけで、そういう人達で生産も生活も成り立っていたわけですね。ところが、実際都市住民の方の発想からすると、家庭の生活というのは自分のまわりだけの問題であって、あとは全部自治体がやるべきだということになっちゃうわけですね。それで財政上の問題なんかが全部出て来て喰い違いがいくらでも起きて来るということになっちゃうんですね。確かにそうなると、農民の方は、単にこの生活ということだけじゃなくて、せきさらいというようになことを通して生産的な労働の方にも影響を及ぼして来るということはあるわけですね。

(細谷) この辺から農業のいわゆる共同の組織というものが、従来の部落の中でね、かなり自己完結的に生活の共同ということをして、先にいった井戸さらいから屋根ふきから水路清掃までという形でやって来ていたのに、そういう形では非常に完結しにくく、いろんな意味でなってきたりして、そうなるとう然行政の問題にぶつかって行くんですね。生活単位が広がって行くということもあるし、その辺がその農民のこれからの生活破壊に対して、島崎さんが何が破壊の原因で、何を斗いとらなければならぬかっていうことをいっておられて、農村自治論ということをおられるわけだけど、従来の「共同体」に復帰するのではなくして、一寸違う新しい次元でそういう農民の共同性のあり方というものが考えられなくちゃあならないはずなんだし、その辺がどうなんですかね、僕はいつも農家の青年に聞かれると、いつも相手にあずけるってさつきはいつたんだけど、わかんないんですね。島崎さんがここで重要な問題を出

しておられるんだろうと思うんだけど。やっぱり行政を抜きにしてはできないんじゃないですか。

(安孫子) そうですね。さつき僕が生活のいろんな置き換えていくのが、たしかにせきさらいを町なら町がいろんな人夫を雇ってやるとか、ゴミを昔は、いや農村なんかでは今だつてそうだろうけど、捨てるなんて頭はなかつたんですね。それが都市的なものになれば、清掃車が週に一回とか二回、三回とか必ずまわって来て集めて行くというように変わるわけで、そういうような置き換えていくものを考えて行くとき、その置き換えていくのが自分たちで決定できるものでないといけないというのがそこですね。自治体がやるっていうのは、自分たちが市町村長を選び、議員を選ぶっていう形で一応参加できるわけですね。それも無責任な参加でなく、つまり税金は出さないけれども皆やれとかね、こういう仕事を自治体でとにかくやれっていうんでは成り立たないんだから、そうするとどうしても自分たちが実際に参加して自分たちが考えて責任をとったような形での行政のあり方というのを考えざるをえない。そういうものに段々段々変って来てるんじゃないかと気がするんですね。用排水路なんてのは、実際、非常に難しいあれがあって、この頃は用水路と排水路っていうのをかなり厳密に区別するっていうところが増えて来てるようですね。こっちは排水路だつていうときにはつきり分けてやるんだけど、そこに田んぼの排水だけでなく、家庭での下水も全部合わせて使うんだつていうことになる、どうしても問題がもう一つ複雑になつて来るわけですね。やっぱり行政

側かそこにかかわって来ないと、従来の水利組合的な発想だけでは最早解決がつかん問題が沢山出てるんだと思うんです。

(細谷) 純農村でも養豚なんかの排水の問題があるでしょう。

(安孫子) あれはもう畜産公害なんていうんではつきり出て来てるんですね。

(岩本) これは山形の南館の私の近くといつても、まあずつと離れた山の方で養豚やってる人の話なんです、「俺があその山で養豚はじめたときには誰もあんたここに人間いなかた。それが今になってあとから入って来た者がそこに家を建てて、養豚は悪い悪いって、追い出そうってするのはどういふことなんだ」っていうんですね。これはやつてる本人にとつてはやつぱり大変深刻な不幸だと思うんですよ。彼にいわせれば、「養豚場撤去なんていつてる連中はとんでもない奴らだ。はじめたときはそこに誰もいないからはじめたんで別に何も問題なんてなかつたんだ。入って来た奴が問題おこしてるんじゃないか」っていうことになるんですね。

(安孫子) 飛行場と似てるんだね、それは。飛行場もまあこれ以前に作られたのがあつたんで、そのまわりに人が住むようになって騒音公害っていうことになったところも多いんですね。こういう問題はいろいろな事例があるんじゃないですか。結局は自分たちがこの問題をどうしなきゃいけないかっていうことを考えなくちゃいけないんです。飛行場なんていうのは、簡単に行くかどうかはわからないけど、要するに飛行場が移転する気がなければ、騒音公害の及ぶ周辺の土地は全部宅地並みの値段で買いとれば一番現実的な

解決なんですよね。だけど、個々の農民のやつてる養豚場に、そんなことしておいの及ぶまわりまで宅地並みに買いとらせて、真ん中に畜舎置くようになっていふわけには行きませぬよ。そこらへんまでになってくると、この問題は一方では住民運動とか何とかという運動の問題だし、それから結局は同じことなんです、行政っていつたつて住民運動の延長ですからね、そういう意味では上からの行政ではなくて本当に住民自身が決める行政というものも提起されてくる必要があるわけですね、こういう状況の下では。

(岩本) さっきの西川の集落移転なんか、何であのようによくもの集落がまとまって移転できたかについていうと、要するに役場の行政として手が及ぶのはここまでで、そこからはずれたところまでは面倒みきれないという形にしまして、今、移って来たなら補助金出すっていう、これに乗り遅れたらもう駄目だという状況に追い込んでおいて強行したんです。だから、町として面倒みることがなくなつた移転したあとに残っているものと家に、年寄りたちが夏の間だけでも行って住みたいっていうことで現実に行つて住んでるんです。いや、今、冬だけでもあの老人たちが町の団地の方におりて来ているかどうかともわからないんですが、そのまま何となく息子たちと離れて、行政から放棄された集落に住んでるってことも考えられるんですよ。だから、農民の生活破壊を考えると、三チャン農業の当然の帰結として老人問題っていうのが一つ大きくかちんでくるんじゃないですかね。

(細谷) 昔の伝統農法と違つて、家族っていうのが老人がいて、

世帯主がいて、息子がいてという構造とね、伝統農法だと何となくそれがこううまくかみ合って、役割分担がそれぞれあるんですね。そうして一つの家の秩序が保たれているんですね。さつき勝又さんが大瀧の農家についていわれたように、最近は若いオペレーターだけが農業やって、老人はやるのがなくなるといふことなんです。やるのがなくなると人間はついでという、これから先は人間論になつてしましますが、困っちゃつて、それでギャンブルに行くついでということもなつてしまふんでしょうか、そういう問題もやつぱりかなり……。

(勝又) そういうものを裏返すと、農家の生活破壊の問題の顕在化ということになると思ふんですね。

(岩本) 年寄りたちはとにかく「じいちゃん、ばあちゃん何もやらなくていい、遊んでいてくれる」ついでいわれるのが一番辛いらしいですね。風呂燃そうといたつて、プロパンのせんひねればいいだけ、草むしろうたつて猫の額みたいな西川町の団地ではむしる草の生えるのが追いつかないつてあんなばいで、家畜にえさをやろうにもその家畜もいない、要するに何もありません、そんなところにはとても住めないから、夏の間だけでもとにかくもとの家に住みたいつていうのがさつきの話です。ただ、行政の方がそこまで面倒みないつていうわけで集落移転したんだから、もしかとしてそこに急病人が出て救急車も行かないつていう極端なことにもなり兼ねないんですね。行政の方が杓子定規に考えているとすれば。

(安孫子) 消防車も行かない……。それで、私たちが斎藤晴造

先生を代表者にしてやつた『過疎』の研究、まもなく本が出るんですが、徳島の例でみると、あそこの過疎地帯つていうのは、老人家族が非常に多いんですね。若い世代はみんな大阪あたりに渡つて働いているんですね。時々帰ってきたり、仕送りやつたりしてね。細々と自分の喰べる分だけは老夫婦が作つていっているのが、村の中に沢山残つていっているんですね。ああいう形での過疎が出て来つていふのは、年寄りは都会に行つても何も働くことはないし、雇つてくれるところもないもんだから、結局村に残つていられる方がまだ生活基盤があるつていふか、とにかく人間として何かやることがあるんですね。自分の喰う分ぐらゐの畑とか一反ぐらゐ田んぼを作つて飯米だけとるといふことはできるんですね。ところが、今いったような形で、村に若い人たちがいないから、村に税金も入つて来ないつていふこと、村の自治体としてのサービスがほとんどゼロに下がつちゃうつていふ状況もここでは出ていっているんですね。そういう形での生活破壊つて、普通まあいつては出ただけで、しかし、それはそれなりにやつぱり生活として成り立っているわけなんです。だからとつて、それじゃあそこに若い者たちが一緒に住むことができるかつていふと、そんなことやつたらかえつて一家心中でもしなくちゃならないつていふ状況がすぐ出て来るわけなんです。そこをどういふ風にみて、この問題をどういふ風に解決するかつていふことを見通せないつてね。ここではこういう風な形で生活破壊が進んでいますよつていふと、どうにもならないんですね。

(岩本) これやつぱり年寄りたちが、都会の娘や息子たちのとこ

に孫の顔を見に行くけどもね、そこでどんなによくされても半月一月もいると帰りたくなって帰って来るっていうのは、要するに都市には住めないんですね。だから、西川町で折角町の中に集落を移して便利であろうということで移しても、そこには年寄りや住みつけないんですね。

(安孫子) おそらく生まれたときから育った土地であるという執着みたいなものもあるだろうけど、一番大きいのはやつぱり細谷さんもいつてるように、とにかくそこで自分が働いている、何か役立っているという意識を持てるか持てないかということが、そこに住めるか住めないかということの決定的なあれになると思うんですね。サラリーマンだつて三年に一べんずつ転動して、転々としてまわつて歩くっていうのも多いんですが、それはそこへ行って何がしか自分の仕事があるからそういうことやっておれると思うんですね。それがなくて、ただ家にいてぶらぶらして気楽にしているといわれたつて、生きて生かれないんじゃないですかね。蟄居閉門を仰せつけられたようなもんでね。

(細谷) ところが今の農村で機械が入つて老人の仕事がなくなるといつても、その老人が五〇代ですからね。七〇とか何かになりや別かも知れませんがね。

(安孫子) それが逆に若い者だけがどんどん出て行つた村では、七〇になつても、あるいは死ぬまでそれこそ農業を必死になつてやらなくてはならないことになるわけね。つまり、若い者がいれば年寄りがはみ出すし、若い者が出つちまえば今度は年寄りだけ

がやんなくちゃあいけないし、つていう両方のタイプが出てくると思うんですね。昔だったら、農業つていうのはやつぱり家業で、生涯手段の体系がやつぱり土地を基礎にして全部あつて、家業だから親が子供に教えるというね、そういう形であまり教育なんていうのはいらなかつたんですね。家の中で教育できて、ちゃんと農業やる労働力としては育つて来たんですね。それがそれだけの人数がいらなくということになると、とにかく親と子とは全然別々の職業に就くということが一般化して来るわけですね。逆にいうと教育がそれだけ大事になつて、農業だけしかできないつていうんではどうにもならなくなつて来るし、また学校に行つてしまつと、農業の方は中途半端になつてやろうと思つてもなかなか出来んということになるんですね。そういうわけで就業構造自体が變つて来て、就業構造の違いが教育の受け方の違いになり、したがつて、それが生活構造の違いになるつていうような、そういう違いつていうのはずい分進行して来たと思うんですね。

(岩本) 今の社会では家庭内教育つていうのが役に立たないつていうか、無視されてしまつてゐるんですね。つまり、親のやつてるのを見て子供が覚えるつていう、農業なんかまさにそうだつたんですが、漬け物の味なんていうのは、母親から娘とかね、姑から嫁につていう形で伝わるわけだけど、そういうものがいらなくされちゃうつてゐるわけなんですよね。教育は全部、外にまかしちゃうつてゐるつていて、それなんか一つ生活の破壊の結果なんですかね、原因なんですかね。原因になり結果になり、両々相まつてますます

つていうことになるんでしょうけどもね。

(安孫子) 一番大きい原因というのはね、やっぱり一つは農家経済のあり方がうんと変って来たことに基本的な原因があると思うんですがね。それはまた同時に生産力的な変化をもなつて来ているわけですけどね。宮城県の農協が昨年だったか、明けておとしになるかも知れませんが、「農家は野菜を作りましよう」つていう運動をやつたわけ、農協婦人部を動員して。

(細谷) 今もやつてますよ。色麻町へ行つたらやつてました。

(安孫子) この頃、町の人もずい分入つて来たからつていうんで、農村で八百屋はじめたらもうかるだろうつていうんでやつたら、買いに来るのは農家ばかりつて話もありますよ。町から来た人達は猫の額みたいところで一生懸命家庭菜園をやつてるつて有様で。

(細谷) 色麻町に行つたらね、あそこで今、農協が牛を一頭ずつ飼おうつて運動と、野菜を作ろうつていう運動をやつて、そのために野菜作り講習会を農協が農民を対象にやつてるんですよ。それで非常にこのところその受講率があがつていっているつていうんですね。

そういうわけで、さつき行政の問題が出たけど、やつぱりもう一つ農協が地域の農業なり農民に対するサービスをきめこまかにやる必要があるんじゃないですかね。今、いった牛を飼いましよう、野菜を作りましようつていうのは、純粋に経営だけのことではないんですね。まさに農民の生活を農民らしくやつて行こうという考え方があつて、しかも一時期にはかなりの年まで出稼ぎに出たと、それが今は全部Uターンで戻つてきて、野菜作りでも始めようかつていう

んですね。そこに農協が目をつけて、そういうような呼びかけをやつて、そのかわり畜産の販売なんかは、農協が本場に責任持ち切れるかどうかまだ一寸難しいですけど、姿勢としては責任を持つと、ほまち稼ぎ程度でもね、ということをやつていっているんですね。あいうことは大事なことだと思つてですね。

(勝又) だから一つはね、農家の経済が大きく変つちやつてる、もう全部でしよう、薪炭だつてプロパンになる、屋根だつて瓦になる、全部金さえ持てば生活そのものは独立できるんですよ。向う三軒両隣にかかわりなしにね。迷惑かけないで独立できるけれど、生活構造は独立すれば独立するほど孤立になるわけですね。孤立すれば孤立するほど共同性つていうのがなくなつてきているでしょう。共同性がなくなつて来るつていうと、僕はある意味では農漁村の社会生活つていうものの地域性つていうものが全部なくなつて普遍化して、だからテレビで料理番組を放送すると、どこの家でも同じ料理になつてしまふ。さつき岩本君がいったように、漬物をばあさんから母さんへ、母さんから娘へというものは、やつぱり地域性の一つのファクターだと思つてますよ。

(安孫子) その意味で家族自体が切れちゃつたんですね。

(勝又) そうそうそう。だからバラバラになつちやんだよね、要するに。

(岩本) つまり漬物をつける腕を持つよりも自動車の運転免許を持つた方がはるかに有効だつていうことの中ですね。

(勝又) それでいいんだよ。というのはね、二日も働ければ漬物

にする野菜が買えるんですよ。これ、野菜を作る手間考えたら大変ですからね。また、漬物そのもの買って来ても、よそで働いた方が稼ぎになるからね。そうなりや馬鹿馬鹿しくて、野菜なんか作ってられなくなるし、漬物なんかもつけないのは当然ですね。そういうことが生活をみて行く尺度の中に投影して来れば、当然、農家は野菜を作りましょうっていう運動が今あっても一向に不思議でないんですし、それは経済行為じゃあないんですね。何かしら農家っていうものを、いい意味で考えて、自分達で土に親しんで何かを作って行こうっていう試みなんだと思いますね。農業協同組合っていうのは、少し消費生活協同組合あるいは金融協同組合の機能ばかり大きくなりすぎて、生産自体は関係なくなつて来ていましたからね。物を売るとかなんていうことばかりが大きくなつてね。そういう農協が多いんじゃないの、生産を二の次にしてるのが。

(岩本) 農民のための農協じゃなくて、農協職員のための農協なんてこともいわれますからね。

(森) まあ農協職員のためっていうことでないにしろ、やはり農協も赤字だしちや困る、黒字にしなくちゃならないっていうんで、農協自体のために活動してるっていう部分は確かにありますよね。

(安孫子) やっぱり一つの資本体っていうか、その側面からどうしても赤字だしちやまずいっていう考えは働くでしょうからね。利潤までは追求しなくともね。それはその採算で働く場合もありましょうからね。

(岩本) ただ、初期の農協はいろいろ生産に手を出して、大体失

敗して、その結果、今のような流通資本になつちやったり、貸付資本になつちやったりしたという経緯もあるんでしょうけどもね。

(安孫子) この頃、この数年、今いったような形での反省をあらちの農協でやって、農業のやり方を本気になつて考えようっていうような動きが出て来てはいるんです。ただ、変な方向に乗つかつて行つちやつた奴は、大型機械・集団栽培みたいなことに行つちやんたんですが、そうではなくて、もう少しじっくり踏みとどまろうっていうのが、いろんな形で出て来たっていうのはあるんです。南郷なんか、さっきの農家が田植機を改良したっていう例を出したけど、あそこの防除機械はね、俗称南郷式っていう、これはメーカーとタイ・アップして南郷で一番使いやすいようなものにしたんですね。それを今度はメーカーがよその村に行つて、これは南郷農協と一緒に開発した機械だなんていって、売って歩いていって、南郷ですね。そういうことやる農協が段々増えて来たんですね。とくに、そういう中で、南郷で小学校の先生が授業で小学校で教えようと思つて、専業農家と兼業農家の実態調べていたら、兼業農家でタクシートの運転手やつていて、娘がどつかで働いてるっていう例なんです。全部で四八〇万の所得があるっていうんですね。農業所得は百何十萬かなんですが、こういう兼業っていうのはね、タクシートの運転手だから自宅から通勤ですよ。これ悪いっていいないと思うんですよ。田んぼだつて結構反収なんかも高いし、こういう例をもつて来て、これは生活破壊だとはいえないですね。いや生活破壊どころか、生活水準は高いし、これが駄目だつていう根拠

はどつから出て来るかっていうんですね。そこんところが非常に難しいんですね。出稼ぎなんかで半年も家を離れてるっていうことになる、いくら収入が多くてもやはりおかしいうことになるでしょうけど、在宅通勤ですからね。仙台あたりのタクシー運転手と違つて二四時間交代ではないから、毎日朝行つて晩には帰つて来るっていうんですね。

(岩本) 非常に健康なんじゃないですかね。

(安孫子) それ小学校の教材に使おうっていうから、駄目だつていったんですよ。特殊な兼業でね。これじゃ兼業がバラ色になつちやつてね。皆、兼業に行きたくなつちやいますからね。ただ、それが不景気になつて来た時に、どういう影響を受けるかかっていうことまで突つこんで行かなくちやいかんし、やつぱり基本的には低賃金労働で、どういう劣悪な労働条件で働いていて、そして、それが正規の労働者の賃金水準やら労働条件をどういう風に引き下げているのか、そこまで踏みこんでみて、考えてみて、この兼業は一体どういう意味を持つて居るのかっていうことを考えなくちやいけないんで、ただ家計の面だけで議論したんでは、やはり農民の生活構造つていうのはとらえ切れないと思えますね。

(岩本) それにやつぱり今度の不況によつて生活破壊や何かのパターンが變つたでしょうね。

(安孫子) と思えますね。出稼ぎ先がなくなつたからね。さつき細谷さんがいつたように、今年はお出稼ぎ先がなくなつたから野菜を作ろうかてな具合に気楽に變つてくるんですね。実際、深刻な意味

があつて變るわけじゃあないんですね。

(細谷) それと誘致企業が相当倒産したりつてのがありますね。これは相当なものですよ、宮城県では。

(岩本) いや山形でもだいぶひどいですよ。それに企業本体は倒産しなくても、白鷹あたりの日魯の缶詰工場のような進出工場の閉鎖なんていうのは、地元にとつちや倒産と同じですからね。

(安孫子) ほかに山形県じゃあ場所は一寸忘れましたが、多分村山地方だつたと思いますが、缶詰工場で希望退職を募つてパートに来ている女の人達を呼んでいろいろ説得したら、「じゃあ仕方ないから私やめましよう」つていうことで、ふたあけてみたらパートの女の人が全員くび切られていたんで、これ希望退職と違つていうんで地労委に提訴したつていうの、昨年一月か二月だつたですが、新聞記事で読んだ記憶ありますね。もう一年近くたつてますね。何かこの退職予定者だけが別個に労働組合を作つたとかいつて……。

(岩本) 今、UターンとかJターンとかいわれて居るけれど、これは不況になつたから起つたのか、それとも起るべくして起つたのか、この点はどうでしょう。

(安孫子) 基本的には不況でしょう。ただね、前から感じているんだけど、都会に出て行つたけど、期待外れだつて帰つて来るのは数は少ないけどあるにはあつたんですね。ただ、家へ帰つてもどうにもならんていうんで、この都会の中でゴチャゴチャになつちやつてね、どこへ行つたかわからんとか、變なところに入りこんじやつたとかいう者も相当あるんですね。

(岩本) それから一たん家には帰つて来たんだけど、もう農業はやりたくないっていう格好になって、UターンでなくてJターン、家には戻つたけど、農業はやらなくて別の仕事をやってるっていう風なもの結構多いんじゃないですか。

(安孫子) O型っていうのもあるんじゃないですか。三べん戻つて四へん出たなんていうの。W型っていう方がいいかな。

(細谷) 見てると今いったUターンっていうか、出稼ぎが駄目になつてね、戻つて来て、野菜作ろうっていう出したりするのは、やっぱり年寄りなんですよ。ファクターに二つの理由があつて、一つは、若い方が、つまり三〇代の方は、不況にもかかわらずなお働けるところがあるという、まあ四〇代が境となつて、もう五〇代になると駄目だということ、もう一つは、野菜を作ろうっていうことに素直に入れる、昔とつた何かがあるんですよ、中年以上には。若い方はもともとそれがなくていきなり出稼ぎに行っちゃったんでね、要するにそういう気が起きないんですよ。そういう二つのファクターがあつて、Uターンして農業にもう一べん戻ろうっていうのは、どうしても年寄りだということがあつて、さつきいった農協あたりでも牛を飼えとか野菜を作れとか、そういうようなこと大体年寄り向きに始めるといふことになってるんですよ。

(岩本) それからまあ生活破壊の問題として、これは事務局なんかやってると、村研に対する注文が来るんですけど、民俗学なんかの関係の人、あるいはそれにシンパシーを持つ人たちが、どうも最近の村研は経済学みたいなことばっかりやってて我々全然入る余地

がない、何とかならないかかっていうこといつてくるんですが、今度の島崎さんの問題提起のなかに伝統的な生活枠組みの解体というよな項目があるんで、そういう風なところで私はやはり民俗学関係の人たちにも積極的に入つて頂けるところがあるんじゃないかと思ふんですけど。例えば年中行事とか祭りの問題なんかでもそうなんですけどね。私にいわせると年中行事を破壊したのは、大体もう新暦の採用にさかのぼるんで、あれは旧暦、つまり月を基準にした暦でやつて来たんですからね。まあ、こんな問題なんか、村の年寄りに聞いてみると、盆踊りなんかでも、例えば西川の例ですけど、山の部落から降りて来て間沢の町でいくら盛大な盆踊り大会があつたつて、どうも行く気がしないっていうんですね。これは相馬なんかでもあるわけで、今もう部落単位の盆踊りはなくなつて、市の中心部で大きいのが一つあるだけで、踊りに来るのは、これは距離の問題もあるけれど、大体が町の連中だけっていうんでね、農村の人たちの参加の機会がなくなつてんですね。

(安孫子) そういえば、仙台も町ん中の盆踊りがどんどん盛んになってますね。大都市の祭りっていうのは、もともと自分は見に行く方で、自分が参加する祭りじゃあなかったんですが、このところ参加する祭りっていうのが都市で増えて来てね、農村の方が見物に行くつてというふうになつて来てるんじゃないですかね。

(岩本) 祭りつてついうのは、いまや農村から離れた人がやりたがるつてなもんですかね。

(安孫子) 一べん本当に農村から離れた人が、やつぱり農村から

離れてしまうと何かこう淋しいっていうんで、自分たちで盆踊りでもやろうかっていうことになるんじゃないですか。仙台的北山なんてところはもう三日ぐらい盛大にやりますよ。

(森) 一昨年、昨年あたりからそういうの盛んになって来たんじゃないですかね。私の住んでるのは山形の町ん中ですが、うちの近辺自体もそういうの始めてますね。市でやる花笠踊り、あれだけ見に行くんじゃないけど、面白くないっていうんでね。

(岩本) ただ、そういう形でやる盆踊りっていうのはどうですか。昔の形のままじゃないんじゃないですか。相馬市の連合盆踊りなんていうときに、唄を聞いていると、あそこは相馬盆唄の本場であるにもかかわらず、北海盆唄が出る、八木節が出る、何でも出るんですよ。相馬盆唄なんて影が薄いですよ。あぁなりやあ、相馬の盆踊りじゃあないですよ。

(安孫子) 抽象的な盆踊りですね。

(勝又) ばくらの方、仙台のベット・タウンで泉市の黒松の町内会が、自治会から市議員が立候補すると、盆踊りはじまるんだよ。不思議なもので、今までそんな気配もなかったのか、突如として……。それでも五、六年になるかな、しかも年々盛大になってきた。二日か三日連続して、本当にすごいもんだよ。

(安孫子) そういうこと村の中でもばつばつ出て来てるんじゃないでしょうか。これもある村でね、村の運動会なんて絶えて久しなかつたんだけど、やったらね、皆喜んで集って来たっていうん

でね、年寄りから若い者から。それはやつぱり昨年不景気で、若い連中が意外と村中にいたんだね。そうしてやつたら非常に活気があつて、これから毎年やるうってことになったそうすね。どつかでやつぱり生活回復みたいなこと、連帯を求めるなんていうと変な表現かも知れないけど、絶えずどつかにあるんですね。まあ、何かつながりを求めるっていうようなことが……。

(岩本) 運動会っていうと、私とこの山形の南沼原小学校だけど、もともとは南沼原村の村の運動会で、学校の運動会としてじゃあなく、村の人達が全員参加してやつて来たんですね。最近、ここ人口急増地区で生徒の数が増えて来てるもんだから、そういう形でやつたんです。プログラムを先生の勤務時間内にこなして行くことが出来なくなつたっていうんで、学校の方で父兄の参加する競技というところで一つか二つに限つちゃつたら、村の人たち、とくにもともと住んでいた人達が淋しがって、いま日曜日に小学校のグラウンド借りて別に村の運動会やつてますよ。

(勝又) 僕んとこの黒松でも学校の運動会のほかに、そこ借りて日曜日に町内対抗のそれやつてますね。

(安孫子) 話は変わりますが、その伝統的生活の枠組みっていう奴で、南郷に契約講が四十いくつあるわけ、江戸時代に出来たのかから新しいのは、戦後出来たのっていうのはないようですね。見ると階層によつて全部違うでしょう。新しいものがどんどん作つて来たとか、正式の名称と別にあれば侍講だとか、あそこは士族っていうか涌谷の

陪臣、家中侍がいるんでね、それから借屋講とかあつてね、その成立と階層と機能とを解明してみると面白いと思つてゐるんです。

(勝又) それは面白いですね。

(森) それは無尽講とは違うんですね。

(安孫子) そういうのもありますし、違ふのもあります。また、機能がずんずん變つてゐるつていうのもあります。だから、その機能の變化をやつて現状での契約講を中心とした生活の局面とつていうのがどうなつてゐるか、あるいはそこからどんな問題が起きて来るか、つていうあたりを、いろいろな問題と引っかけながら現在の生活構造つていうことを明らかにしてみたいという氣はあるんです。あそこは町村合併やつてない町ですから、四十いくつの契約講やれば大体明治からの動きはきちんと追えると思つてゐるんです。

(勝又) それから村規約つていふのありますね。

(安孫子) その村規約は庄内で一つ見つけてますね。

(細谷) えー、明治のね。古いのはポチポチしかありませんね。三

〇年代くらいからでしたかね。

(安孫子) 明治の前半がないんです。

(細谷) 藩政期つていふのは本当にもうポチポチとしか。北平田なんですけどね。牧曾根ですよ。現在までとにかくつながつてゐる。一寸、欠けるのが、昭和恐慌期、あのあたりです。

(森) 私の知つてゐるの、馬町では文化一一年からかな、ずっと契約講つていふ形で今まで来てゐるんですね。

(安孫子) そういう奴を歴史的な過程をたどりながら、それは生

活の一局面にすぎないだろうけれど、その變化を少し広い視野で各時代ごとにおさへながらね、ずっとやつて行くつていふことがあつていいですね。共通課題でなくて自由報告の方でいいから、生活破壊つていふか、生活の變化を入れながらね。

(勝又) 安孫子さんが出された第一の問題点、前提条件の問題がないつていふと、現在の經驗的なものをデータ毎にケース・バイ・ケースで追つてしまつただけで、一体何だつていふ科学的に立証して行くことは出て来ないと思つてゐるんですね。是非、僕は生活破壊つていふ今日の課題をみるために、そういうものが欲しいつていふか、それやらないと将来の方向性つていふものを学問的に志向するつていふことが非常に弱くなるつていふ氣がするんですがね。

(安孫子) どういふ問題が村規約、あとでは常会の決定事項みたいな形ですつととりあげられて来るかつていふ、そこそこだけで少し広い視野でおさえて行けば、かなり重要な變化つていふか、推移が出て来ると思つてゐるんですね。

(細谷) 経営の變化と結びつけて行くと……。

(安孫子) えー、経営とか、あるいは基本的な生産力構造の變化とかね。まあ、家計までは一寸つかまえて行けるかどうかからななければ……。特徴的な時代ごとと段階ごとと切つて行けば、非常に面白くなるんじゃないかつて氣がするんですがね。

(森) 私のさつきいつた馬町つていふのは西田川郡の西郷村、えー大山の近くの町ですが、ここでは部落財政の資料がずっと続いて残つてます。毎年非常にきれいにとつてあります。あそここの部落財

政関係はよくわかりますよ。

(安孫子) 山はほとんどないでしょう、あのあたりは。それで部落財政があるっていうのは……。

(森) それは近くの下加茂もそうだけど、部落有財産は田んぼなんだな。谷地みたいなものを開いて、部落が所有して、それを小作人に貸してんだな。部落が地主なんで……。その資料が小作契約書はじめ残ってんですよ。馬町もそうだけど、下加茂の方が規模が大きいですね。

(岩本) 僕としては、さっきから例に出してる西川町をはじめ、小国とか白鷹とかの集落移転のてん末記を是非やってみたって気はあるんです。これは歴史家としてもどっかできちんとさせておく必要があると思うんです。ただ、今年の場合は事務局なんで、一寸無理ですが……。これだと県とか市町村とか行政の方からも資料がとれるし、実際に移った農民たちの話もすぐ聞けるんですけどね。ここは大川君の入りこんでる村だから、彼がやってくれると一番いいんですが……。

(安孫子) 西川ならば川土居の部落財政なら明治二二年ぐらいから昭和二五、六年ぐらいまで、資料が僕んとこにあるんです。筆写した奴です。川土居のなかの四部落分があるんです。大体そろってるんじゃないですかね、途中少し抜けてるところはあっても……。

(岩本) とこで話はずい分、具体的な展開をみてきているんですが、この辺でズバリいって今年度の共通課題のテーマをどうしたらいいかっていうことをやって頂きたいんですが。

(細谷) そうですね。生活でも生活破壊でも、結局どうなんです

かね、農民の場合にはその場場っていうのは、やっぱり家と村ですね。(安孫子) 生活破壊というのは、島崎さんの問題提起でもわかるように、ちゃんとあれがついているように、ただ一般的な生活破壊でなくて、かっこつきの使い方しないと具合悪いことばなんです。(岩本) 我々がきょう話して来たのはもう少し幅広いところでや

ってるんで、一寸、島崎さんの意図とは……。島崎さんのことばはかなり限定づきで使おうとされてますからね。たしかに島崎さんの問題提起の中でも、伝統的生活枠組みの解体っていうことをいってふだから、我々の今日話したようなことも当然入っているでしょうがね。なかなか会員のいろいろな意向をいれながら適當のテーマを決めるのは難しいですね。

(細谷) 生活破壊ということははっきり入れた方がいいですね。

ただ生活としちゃうと、生活っていうことばは無規定的な概念ですから、焦点がなくなつてダラダラダラダラつてしちゃいますからね。今日の生活破壊っていうことに一応焦点を合わせて、そこから農民の生活とはいかなるものなのか、というように、どこか扇の要を作っておかないと、完全に拡散しちゃおうおそれがありますね。まったく無関係に祭りの話が出たかと思うと、別な方から出稼ぎの話が出て来るという形では困りますね。まさに現時点にシリアスに問われている農民の生活破壊なんだということに焦点を合わせておく。そして、それを解くために改めて農民の生活とは何ぞやということにたちかえらなくてはならないんですね。

(安孫子) 「農民にとつての、生活破壊」とは何か」つていう島崎提案をサブ・タイトルにしては……。それでもつて中味をはつきりさせて置く……。

(岩本) 「農業生活の歴史と現状——農民にとつての、生活破壊」とは何か——」つていふのはどうですか。

(安孫子) 歴史と現状がいいか、理論と実証がいいか。

(勝又) 歴史と現状の方がいいな。サブ・タイトルがつかなければ理論と実証もいいが、やはりあのサブ・タイトルつけて考えるときは、歴史と現状の方がピタッと来るな。

(細谷) そうねえ、生活破壊つていうことになる、理論と実証つていうよりも、歴史と現状の方が……。

(勝又) さっきの細谷君の厨の要つていうのにもピシッと合うよ。うな気がするんですよ。それに安孫子さんが最初にいつた農民生活の基本というか前提を明らかにしないと、生活破壊を問うということがはやけて来るといつた提案にも合うと思うんですよ。

(安孫子) 皆、喰いつけるし、しかもサブ・タイトルがきちんと

ついでるから収斂するとはここだつてのははつきりしてますね。

(細谷) そこをテーマの説明としてキチツとして置くことが大事ですね。ただ、生活破壊」とは何かつていうことを問うときに、安原さんの意見にもあつたし、安孫子さんも今日いつたわけだけど、じゃあスタンダードな農民生活とは何なのかという問題はあつたわけです。そのスタンダードな農民生活像如何を問うときに、もちろん理論的な問い方もあるけれど、やはり歴史的な展開を問うというこ

とも必要なんで、そういう意味での歴史なんだと、あくまで。ただ、漠然と歴史を述べられたんでは困るんで……。

(安孫子) それは「研究通信」九九号六頁の島崎提案の中にも出ているわけで、「高度成長」の過程に広汎に進んで農民の生活破壊の現実から出発し、破壊される以前の「農民生活」とは何だったのか、それを破壊する力と破壊される側の農民との関係のなかで生活破壊の実相をつかんでゆく、現に生活破壊が進むにもかかわらず、よくいわれる生活擁護の斗いが何故広汎な農民をとらえないのか、生活を守る」とは一体農民にとつて何なのか」というあたりは、今のタイトルだとそのままそっくり生きて来ると思いますね。「こゝろいつた一連の問題が農民・農村の現状分析と生活史研究として問われていいと思う」と述べられてるわけです……。

(勝又) いいですね、ピタリじゃあないですか。サブ・タイトルも生きて来るし……。そこに収斂されてくるというのが、誰が見てもわかるもんね。

(岩本) それでは東北地区の研究会では、「農村生活の歴史と現状——農民にとつての、生活破壊」とは何か——」というのが今年度の共通課題としていいじゃあなからうかつていうことになつたところ、とうとうで終りといひたしまししょう。早速、各宿題委員に意向を聞いてみることにします。どうも長時間ありがとうございました。

× × × × × × × ×

(前略) 会報のはじめに、金沢大学々長豊田文一先生の「ご挨拶に代えて」の中に、「農村は単なる人の集団ではなく、一定の階級構成をもって、有機的に結ばれた地域的社會との見解をもって、農村の健康管理を推進したわけでありませう」と述べ、「私どもの分野では、どうしてもその社會構造を看過しては、農村の人々の健康を向上させることはできません」と書かれてあるのを読み、深い感銘をうけました。医学が現実の問題に直面したとき社會医学でなければならぬことがわかったような気がしました。豊田先生が「この農村医学も農村社會の概念を頭から失えば、その特殊性を失ってしまうでしょう」と申されていますが、現代農村について農村社會学は果してそうした概念を提供しているのだろうか、と考えると、戦前の地主制村落、戦後の自作農村落についてはともかく、四〇年代後半以降の村落について混迷を脱してはいないと思います。このことを大川会員は「今日、とりわけ昭和四〇年以降の日本資本主義下における『農家』・『農民』・『農地』・『土地』・『村』・『行政区』の存立基盤と相互関連を改めて整理しなければならぬ時点に來ている」と述べていると思います。

「資本主義と家」という課題設定のねらいも一つはここにあったと思います。これまでの研究の結果、もう少しテーマを具体化したらという意見があつたようですが、その具体化の方法として、農民生活破壊の問題が島崎会員より提起されたのだと理解いたします。島崎会員は一、生産力破壊と分解の促進、二、伝統的生活枠組みの解体、三、生活破壊の実相、の三つの柱を提起しております。農民

生活破壊へのアプローチとして基礎過程としての經濟から村落構造への方法は妥当なものと考えますが、一の課題を日本農村の全体像として把える場合、地帯別に、例えば水田単作地帯、果樹地帯、畑作地帯なり、それぞれの農業生産構造を十分に明らかにして進めることが必要だと思ひます。二の課題は農民の伝統的な生活枠組とも関連し、村研会員の共通の関心事となる問題と考えますが、今日における部落の機能が問われると思ひます。島崎会員が指摘されたように、それは農村自治論としても問われることでしょうか、その場合、その担い手が誰か、ということが問題になると思ひます。総兼業化といわれる状況の中で、農村の中心的担い手はどの階層なのか、このことは又、農村環境整備、コミニニティ形成など諸政策の結果つくり出される「農村社會」の担い手はどういう農家なのか、といったことにも関連してきます。會員一般から「現段階における農民の主体の形成・ムラの形成」、「一九七〇年代の農家(農村)の性格と展望」といった課題が出されたのも、結局、今日の分解状況の中で農村社會の担い手の明確なイメージを持ちたいからではないでしょうか。いずれにしろ、「むら」の論議が担い手との関連で行なわれることが必要だと思ひます。また担い手との関連では、当然、展望とも結びついて、生産組織(共同経営)なども検討されることになりましょうし、それとの関連で、研究会において、コルホーズ、人民公社も検討することは意義あることだと思ひます。三の課題は、一、生産力破壊に関連して考察するべきだと思ひますが、村研メンバー以外の例えば農村医学者による報告、あるいは教育学者による現

状分析を入れ、総合的把握を志向してもよいのではないでしょうか。
島崎会員の提案にそって、私の意見—感想というべきものを申
し上げて参りました。(後略)